

特別優秀賞

クローゼットのお守り

群馬県 南中学校 一年
窪田 琉良

僕は今年から中学生だ。夏休みの部活は楽しい。その朝もバッグに荷物を詰め込み、バッシュ入れを片手に家を出た。途中でマスクを忘れたことに気づいて、急いで家に戻った。

クローゼットからマスクの箱を取り出すと、その奥にもう一つ、古い箱が見えた。中にはまだマスクが残っていた。少し気になったけれど、元の位置に箱を戻して家を出た。

その夜、母に聞いてみると、「あれはお守り」と笑った。

「あなたがまだ、ここにいたときの話。」と、自分のお腹を指さして話し始めた。

13年前の2009年、その年は新型インフルエンザという感染症がまん延してパンデミックが起きた。日本でも五月に初めて感染者が確認されると、マスクが店から消えた。僕もコロナのまん延で経験したことがある。

母は買い置きのマスクをていねいに洗って、何度も使った。でも、不織布の再利用には限界があるので、定期健診の帰りにはいつも薬局に寄った。でも、まったく手に入らなかった。

臨月になると、母のお腹は破裂しそうなほど大きくなった。その日も定期健診の帰りにいつもの薬局に寄り、店員さんに入荷予定はないか聞いてみたが、その質問はうんざりという顔で、「ありません」とだけ返ってきた。少し遠くに白衣を着たおじさんがいて、母のお腹をチラッと見て、そのままレジの方へ行ってしまった。しかたなく帰ろうとしたとき、その白衣のおじさんが声をかけてきた。

「小さめサイズのものなら、少しお譲りできます。」

その人は薬局の薬剤師さんで、感染リスクの高い人のためにと、わずかに取り置きしておいたマスクを譲ってくれるというのだ。

「ほかの人には見えないようにお持ち帰りください。」と手渡された紙袋を抱えて、母は涙をこらえながら、お礼を言って薬局を出た。

家に帰って袋を開けてみると、箱入りマスクが入っていた。「小さめサイズ30枚入り」。十分すぎる枚数だ。母は、「絶対に元気な赤ちゃんを産まなくちゃ」と思ったそうだ。その後間もなく、僕は無事に生まれた。

僕らを守ってくれていた「お守り」。最初の母の言葉がストンと僕の心の中に落ちた。一期一会の出会いがなかったら、未来が変わってしまっていたかもしれない。13年の時間を越えて、僕もお礼を言いたいと思った。

思い出したことがある。母はいつも、一枚ずつ個装されたマスクを持ち歩いている。小さかった僕がなぜと聞くと、「困っている人に『はい、どうぞ』って、できるじゃない?」と言っていた。今ならその意味がわかる。あのマスクは個装ではなかった。だから、一枚ずつ売ることではできなかったと思う。もしも個装されていたら、一人でも多くの人に行きわたるようにと、白衣のおじさんは違う方法を選んだかもしれない。

誰かの優しさが次の誰かの優しさを生んで、また次の誰かへ。僕もそういう人になりたい。